

【見えない水に支えられて】

翔凜中学校 三年 宮沢 莉久

もし、今日食べた一杯のご飯に、目に見えない大量の水が使われているとしたら、どう感じるだろうか。私はその事実を知ったとき、箸を持つ手が止まった。きっかけは小学校六年生であったときだろう。何気なく見ていたニュースに「バーチャルウォーター」という言葉が紹介されていた。食べ物や製品を作る過程で使われる、目に見えない水のことだという。一杯のご飯では約五百L、一枚のシャツには約三千Lという想像以上の水が使われていると知り、私は驚いた。それまで水とは、蛇口から出てくるものだとか考えていなかったからだ。しかし実際には見えないところで膨大な水が使われ、私たちの生活は成り立っている。その事実是我の中の「当たり前」を静かに揺さぶった。私は、これまで、「当たり前」は、考えなくてもよいものだと思っていた。しかし、本当は、「当たり前前」とは、気づかないうちに支えられているものではないだろうか。その支えの一つが水なのだと、初めて実感した。その日、私は小学校でのお昼の給食の時間を思い出した。お腹はいっぱいだったが、あと一口分のご飯を残してしまったことがあった。

「これくらいならいい……」

と思った自分。その軽い判断の裏に、どれだけの水があったのかを想像すると胸の奥が締めつけられるようであった。知らなかったとはいえ、自分は確かに無駄にしていたのだ。

さらに調べていくと、日本は多くの食料や製品を海外から輸入し、その分だけ外国の水資源に頼っていることが分かった。つまり、私たちは遠く離れた国の水によって生きているのである。その中には、水が十分に使えない地域もあるかもしれない。もしそうだとしたら、私たちの便利な生活は誰かの「我慢」の上に成り立っているのではないだろうか。その考えが頭に浮かんだとき、私は何も言えなくなつた。

世界には、安全な水を自由に使えない人々がいる。一方で私は、水を

使えることを以前まで特別だと思ったことはなかった。蛇口をひねれば水が出る。その「当たり前」は本当は決して、誰かにとっては、「当たり前前」ではないのかもしれない。そう思った瞬間、これまで見えなかったものが、少しだけ見えた気がした。

もちろん、私一人で世界を変えることはできない。それでも「知らなかった」で終わるのか、「知った上で変わる」のかはそれぞれで選択することができる。私は後者を選びたいと思った。食べ物を残さず食べることに。本当に必要な物を選ぶこと。物を長く大切に使うこと。どれも小さなことかもしれない。しかし、

「小さな行動は小さく終わらない。」

と私は思う。その積み重ねが、見えない水を守ることにつながっていくはずだ。

水は、目に見えるものだけではない。見えないところで静かに流れ、私たちの生活を支えている存在である。そして、その流れは、人と人、国と国をつないでいる。私はもう、「当たり前」を当たり前のままにしておきたくない。見えない水に支えられているという事実を忘れずに、自分の選択に責任を持って生きたい。あのと止まった箸の感覚を、これからも忘れずにいたいと思う。

そして、いつか自分の何気ない選択が、どこかの誰かの水を守ることに信じられるような生き方をしたい。「見えないから関係ない」のではなく、「見えないからこそ想像する」。そんな姿勢を持ち続けることが、これからの私にできる一番大切なことだと思う。

「だって支えてくれているものは、見えないのだから。」